

May 17, 2026

天のキリスト 黙示録 1:4-6

1:4 ヨハネから、アジアにある七つの教会へ。今おられ、昔おられ、やがて来られる方から、また、その御座の前におられる七つの御霊から、
1:5 また、確かな証人、死者の中から最初に生まれた方、地の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにあるように。私たちを愛し、その血によって私たちを罪から解き放ち、
1:6 また、ご自分の父である神のために、私たちを王国とし、祭司としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくあるように。アーメン。

一、黙示録のイエス

以前、教会のバイブルスタデーで黙示録 1:12-16 を学んでいたとき、「黙示録のイエスさまってこわいですね」と言った人がいました。黙示録 1:12-16 にはイエスの姿がこう描かれています。「私は、自分に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。また、その燭台の真ん中に、人の子のような方が見えた。その方は、足まで垂れた衣をまとい、胸に金の帯を締めていた。その頭と髪は白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は燃える炎のようであった。その足は、炉で精錬された、光り輝く真鍮のようで、その声は大水のとどろきのようであった。また、右手に七つの星を持ち、口から鋭い両刃の剣が出ていて、顔は強く照り輝く太陽のようであった。」確かに、この言葉通りにイエスの姿を描いてみると、私たちがいつも心に描いているイエスのお姿とは違って、「怖い」と言った人の気持ちがよく分かります。

けれども、黙示録は象徴の言葉を使ってイエスを描いていま

すので、12-16 節の言葉を理解するためにはそこに込められた意味を読みとることが大切です。

12 節の「金の燭台」は教会のことです。13 節でイエスがその「燭台の真ん中に」おられたとあるのは、イエスが教会の「かしら」であり、教会を守り、導くお方であることを表しています。イエスが身につけておられた「足まで垂れた衣」と「金の帯」は、大祭司の装束や君主の服です。イエスは教会の聖徒たちのためにとりなしておられる大祭司であり、聖徒たちを守る「平和の君」です。

14 節の「その頭と髪は白い羊毛のように、また雪のように白く」とあるのは、イエスが聖なるお方であり、また永遠のお方であることを意味しています。その目が「燃える炎のよう」なのは、イエスがすべてを見通されるお方であることを言っています。

15 節には、その足が「真鍮のよう」だとありますが、これは詩篇 60:11-12 に「どうか敵から私たちを助けてください。／人による救いはむなしいからです。神にあって 私たちは力ある働きをします。／神が 私たちの敵を踏みつけてくださいます」とあるように、イエスが神に敵対して教会を迫害し、聖徒たちを踏みにじる者たちを、逆に「踏みつけて」、正しい裁きをしてくださることを言っています。

16 節に「右手に七つの星を持ち」とあるのは、イエスを証しする人たちを、イエスがその力ある手で守っておられることを指します。「口から両刃の剣が出ている」とありますが、この「両刃の剣」は「神のことば」のことです。ヘブル 4:12 に「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髓を分けるまでに刺し貫き、心の思いやは

かりごとを見分けることができます」とあります。イエスは「神のことば」そのものであり、「神のことば」によって私たちに神のみこころを教え、また、その力ある「ことば」によってみこころを実現されるお方です。

黙示録が書かれたのはローマ皇帝による迫害が本格的になり、教会の指導者たちが次々と殉教し、ローマではクリスチャンが集まる場所を失い、地下墓所に隠れて礼拝を守っていたころでした。誰もが、教会は根絶やしにされ、神の言葉を語る者は消え去ると考えていました。しかし、イエスは教会を守り抜くお方、イエスを証しする人々を絶やすことがなく、神の言葉が世界に響きわたるようにしてくださるお方です。イエスは、ご自分がどんなに知恵、力、栄光に満ちたお方であることを示して苦難の中にある信仰者を励ますため、このようなお姿で、ご自分を「主」として示されたのです。そして信仰者たちは、あらゆるものの主であるお方を仰ぎ見て、苦難を乗り越えました。

二、現代のイエス

もし、現代の信仰者が初代の信仰者のような力強さを失っているとしたら、それは、イエスを「主」として信じる信仰が確かなものとなっていないからだと思います。

現代にあてはまる、「自分にとっての」イエスを、それぞれが思い描けばよいのだということを耳にします。しかし、それでは、ブルース・バートンのように、イエスをベンチャー・ビジネスの元祖にしてしまい、聖書のイエスを見失ってしまうことになります。ブルース・バートンは、のちに世界最大の広告会社となる会社を作り、ビジネスで成功した人です。政界にも

進出し、下院議員を二期勤めています。ブルース・バートンが有名になったのは、1925年に書いた『誰も知らない男』("The Man Nobody Knows")という本によってです。この本でイエスは、わずか12人の弟子たちから、その後、今に至るまで続いているグローバル・エンタープライズを始めた天才的なビジネスマンとして描かれています。

聖書からビジネスの原則を引き出した本は、バートン以来、数多くあります。聖書をビジネスの観点から学ぶのは、興味深いことですし、聖書が「自分たちには関係のない本」と考えている人々を聖書に振り向かせることができるかもしれません。しかし、イエスをリーダーシップの模範、ビジネスのお手本とするだけで終わってしまうなら、それはイエスについて誤った先入観を植え付けることになります。信仰者も同じような先入観を持ってしまうと、それは信仰の目を曇らせ、聖書が伝える本来のイエスの姿を見えなくしてしまうこともあります。

「イエスが友である」というのも、今日流行となっている考え方です。私たちが普通、「友だち」に期待するのは、一緒に食事したり、買い物に行ったりすることでしょう。とりとめもないことを話しても相槌をうってくれ、愚痴や不満をぶっつけても、黙って聞いて自分を肯定してくれること、また、落ち込んだときに、ちょっぴり「元気」を分け与えてくれる、そんなことだろうと思います。「イエスが友」であるというのを、そのように受けとめているとしたら、それはイエスに対する大きな誤解です。

イエスは弟子たちに「わたしはあなたがたを友と呼びました」と言われましたが、その後で、「なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです」（ヨハネ 15:15）

と言っておられます。イエスが弟子たちを「友」と呼ばれたのは、ご自分がこれからなさろうとしておられることを明かされたからです。旧約時代にアブラハムが「神の友」（ヤコブ 2:23）と呼ばれたのも、神がご自分のなさろうとしておられることを、アブラハムに明かされたからでした。弟子たちが「友」と呼ばれたのは、イエスからみこころを示されたからであって、弟子たちは、そのみこころに従うことによって、イエスの友であり続けることができたのです。ですから、イエスが弟子たちを「友」と呼んだからと言って、弟子たちがイエスを「お友だち」扱いし、自分たちの「仲間」のひとりにしてしまっただけというわけではありません。イエスは弟子たちを「友」と呼びましたが、弟子たちは決してイエスを「友」とは呼ばず、「主」と呼び続けました。

後に、イエスを「友」と呼ぶ賛美が生まれました。「いつくしみ深き友なるイエスは」、「ああわたしにある友はイエス」、「友なる主よ、喜びなるキリストよ」といったものがそうです。こうした賛美でイエスが「友」と呼ばれている場合でも、それは決して軽い意味では使われていません。イエスはヨハネ 15:13 で「人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません」と言われました。親が子のために命を捨てる、子が親のために命を捨てる、また、兵士が国家や民族のために命を捨てる、それらは気高い愛ですが、その愛は血のつながりに基づいていたり、義務や責任から来ています。けれども、友がその友のために自分の命をささげるというのは、血のつながりや義務、責任を超えたもので、より純粋な愛です。敵・味方というへだたりを越えて友情を交わし、民族の壁を超えてその友のために尽くした人々が、

過去にも、また、今も、世界中に大勢います。そうした愛は、イエスが、罪ある私たちのためにご自分をささげられた愛から来ています。賛美の作者たちがイエスを「友」と呼んだのは、イエスが罪人の友となり、命さえささげられた、十字架の愛を歌うためであって、決してイエスを軽く扱ったものではありませんでした。

三、主であるイエス

どの時代の信仰者も、イエスをたんなる「リーダー」とは考えませんでしたし、教会は「お友だちイエス」を宣べ伝えたりはしませんでした。「イエスは主。」これが教会のメッセージでした。信仰者たちは、自分なりに考え、思い描いたイエスではなく、聖書が教える、主であるイエスを信じました。

一世紀の末、ローマ皇帝は、みずからを「主」（ドミヌス）、また「神」（デウス）と呼び、皇帝礼拝を強要し、それに従わないキリスト者を迫害しました。使徒ヨハネも迫害を受け、エペソを追われパトモスの鉾山に島流しになっていました。キリストは、パトモス島にいたヨハネに、ご自分があらゆるものの主であり、今起こっていることも、これから起こることのすべてのことをも支配しておられることを示されました。

黙示録 1:5 で、イエス・キリストは「確かな証人、死者の中から最初に生まれた方、地の王たちの支配者」と呼ばれています。当時の世界はローマ皇帝に支配され、キリスト者たちはそのローマ皇帝に苦しめられていました。しかし、キリストは言われるのです。「その皇帝を支配しているのは、このわたしなのだ」と。

5-6 節で、イエスは「私たちを愛し、その血によって私たち

を罪から解き放ち、また、ご自分の父である神のために、私たちを王国とし、祭司としてくださった方」だと言われています。これは、キリストの贖いのみわざの見事な要約です。「その血によって私たちを罪から解き放ち」という言葉は、キリストの十字架による救いを示しています。「主」であるお方が、友となって、罪人をあわれみ、しもべとなって仕えてくださった、犠牲となって死んでくださった。ここに神の愛があります。私たちの「主」は愛の「主」です。

8節に、「神である主、今おられ、昔おられ、やがて来られる方」とありますが、「神である主」は、ラテン語で *Dominus Deus*、と言います。古くから礼拝で歌われてきた「栄光の賛歌」では、イエスに *Domine Fili unigenite, Iesu Christe, Domine Deus, Agnus Dei, Filius Patris, qui tollis peccata mundi*、（主、独り子、主なる神、キリスト、父の御子、世の罪を取り除くお方よ）と呼びかけ、*Quoniam tu solus Sanctus, tu solus Dominus, tu solus Altissimus*、（あなただけが聖なる方、あなただけが主、あなただけがいと高きお方だからです）と歌って、皇帝ではなく、キリストが「主」（ドミヌス）であり「神」（デウス）であると告白しています。

私たちは、時として、自分の財産や才能・能力が明日を保証しているかのように思い違いをします。恵まれた生活をしていると、今の豊かさや幸いがいつまでも続くかのように思い込んでしまいます。初代の信仰者は明日の保証のない生活を強いられましたが、現代の私たちにも、明日の保証はないのです。私たちもまた、初代のキリスト者と同じように、私たちを永遠の安息に導き入れ、限りないいのちに生かしてくださる、「主」であるイエスが必要です。困難や苦しみの中にあるときには、

とくに、イエスが力に満ち、愛にあふれた「主」であることを信じる信仰が求められます。私たちの今の世と後の世の幸いの保証はただ神にだけあります。イエスを「主」として信じ、イエスを「主」として歩むこと、そこに確かな人生があり、揺るがない保証があるのです。

この世は、人間がこの世界の「主」だと言います。「おまえが主なのだ。だから、神に従う必要も、他の人に仕える必要もない」というメッセージを、私たちは絶えず聞かされています。そのようなものに惑わされることなく、神の言葉にに耳を傾け、イエスを「主」とする信仰を持ち、イエスを「主」とする生き方を確立することができるよう、主の助けを祈り求めましょう。

（祈り）

父なる神さま、イエスは、よみがえられて 40 日ののち天に帰り、今、あなたの右の座で「主」としての栄光のうちにおられます。「主の昇天」を覚えるこの日曜日に、主であり、王であるイエス・キリストを見上げることができ、感謝いたします。自分を第一にしてしまいそうなとき、イエスが第一のお方、「主」であることを思い起こし、イエスを「主」として歩む幸いへと導いてください。聖霊とともに、父の栄光のうちにおられるイエス・キリストのお名前です。